

日本作業科学研究会ニュースー作ら， さくらー第6号



発行年月日 2009年6月30日

発行者 日本作業科学研究会

ウェブサイト <http://www.jssso.jp/>

編集責任者 吉川ひろみ

「作業，意識，Occupational Presence」 デニス リード博士を迎えて

小柄で気さくで，エネルギーに溢れたデニス リード博士が，大学のサバティカルⁱを利用して日本にいらした。九州から広島，岡山，大阪，浜松



と日本の作業科学者のいる大学や施設を訪問しつつ北上していらした先生は，茨城，北海道へと向かう間の5月17日（日），東京は小金井市の社会医学技術学院で開催された日本作業科学研究会主催の2009年研修会で，今，先生が一番熱心に取り組んでおられる「Occupational Presence」の概念についてお話し下さった。

リード先生は，カナダで最も由緒ある作業療法校であるといわれるトロント大学作業科学・作業療法学部大学院およびリハビリテーションサイエンス学部大学院の教授である。25年以上も同大学の教育に携わっておられるだけでなく，研究者としても80に及ぶプロジェクトに関わり，膨大な数の研究論文を執筆されている。

このOccupational Presenceは，最近先生が考え続けている概念のようだ。もともとは障害のある子供たちに行ったバーチャルリアリティの研究で，プロジェクトに参加した何人もの子供たちが発した「**I was really there!**（本当にそこにいたんだ!）」という言葉が，Presence（存在感）について考え始めたきっ

かけだという。それまでPresenceは，主に「架空の世界」を扱うバーチャルリアリティの分野で研究がすすめられてきたが，先生はこの概念が「現実世界」にも適応すると考え，私達の行う日常作業に伴っておこる存在感の感覚をOccupational Presenceと名付けた。講演では，Occupational Presenceという概念の定義，それに関連する神経学的機構，幸福感との関係，フローⁱⁱとの違い，この感覚が生じる条件や，影響を及ぼす因子，そして，作業療法への適用方法などを説明して下さいました。

100名を超える参加者の皆さんは，熱心に講演に耳を傾け，この新しい概念を，自分自身の生活や臨床場面と照らし合わせながら吟味されていたようである。講演後，まだ十分に聞き足りないともいうように，そこここに人だまりができて，小討論が繰り広げられていた。先生も，多くの人たちの相槌や，質疑応答を通じて，Occupational Presenceの概念形成が一段と進んだと喜んでおられた。先生のもっとも新しい論文は，近々カナダ作業療法ジャーナルに掲載されるとのことなので，興味のある方は，是非ご覧いただきたい。

i 欧米の大学で用いられる制度。教授陣は数年に一回の割合で，長期間，研究や執筆のために通常の勤務から離れることができる。

ii 作業に導かれて生じる心理学的状態を表すチクセントミハイ氏による理論。吉川ひろみ「作業って何だろう」医歯薬出版 p.27-29 参照

（近藤知子，帝京科学大学 医療科学部）

参加者感想

主観的な領域にふみこんだ講演内容で、精神科領域で仕事をしている立場からするととても興味深いものでした。感想のひとつは作業のおかれた社会的文脈や、その作業への本人の意味づけという側面はどうかだろうというものです。作業的存在感といっても、作業に従事する本人を取り巻く社会的文脈と、それが影響している本人のその作業への意味づけとの関連もありそうです。戦争中に捕虜への拷問として、無意味な作業を課した、という話があります。意味もなく地面に穴をほらされては、またその穴を埋めさせる、というものです。拷問ですから、それは辛いものであることは想像に難くないですが、この作業を行っている人の話として、「私は、本当に土の重さと体の動きを感じる、本当にその瞬間に存在している。その瞬間にいること、あるいは、存在していること、それは、自分がしている動きについてだけ考えているような感じ、他のものは何もない、・・・」という表現も素直に読めると思います。しかし、(ちょっと意地悪なことをしてみました)この括弧内の文章は、講演のパワーポイントにあった作業的存在感をあらわす「語り」として紹介された文章です。ただ、下線部分に「音楽」とあったものを「土の重さ」に変えただけです。「幸福」と「作業」との関係をはっきりとすれば、**作業のおかれた社会的文脈**、さらにはその作業への本人の意味づけという側面をおさえる必要があるのではないかと思うわけですが、そのへんはどう議論されているのか気になりました。

ところで、さ来年(平成 23 年)は埼玉で日本作業療法学会が開かれる予定です。まだ仮ではありますが、学会のテーマを「意味のある作業の実現」としています。この仮のテーマを出してから、この研修会もそうですが、テーマと縁のあるエピソードが続いています。

このテーマには、いろいろな解釈も生じてしまいそうですが、上に書かせていただいた内容はテーマの意図に強く関連するものです。これから企画を練りますが、おもしろそうなものがありましたら教えてください。

(大橋秀行、

埼玉県立大学 保健医療福祉学部、
次々期日本作業療法学会 学会長)

平成 20 年度 第 2 回理事会報告

【日時】2009 年 6 月 20 日 18:30~

【場所】くいもの屋 わん

【出席者】宮前、村井、浅羽、近藤、西野、
ボンジェ、港、坂上

【議題】

1. 機関誌担当(西野、港、村井)
 - 第 2 巻第 1 号を国立国会図書館に上梓
 - 医学中央雑誌の審査に通過
 - 第 3 巻第 1 号、11 月中旬完成予定
2. ホームページ担当(浅羽)
 - 13,000 人分の PC で HP が閲覧された
 - 現 IT 管理者との契約が来年困難となるので、12 月から別の管理者を探す
3. 広報・ニュース担当(近藤、吉川)
 - Reid 氏研修会時に新規会員入会
 - JOS へ JSSO の広告依頼中
 - 第 6 号ニュース原稿依頼済み
 - 会員以外もニュース閲覧可とする
 - 会員のみ JOS 論文要旨日本語版閲覧可
4. JOS 担当(ボンジェ)
 - JOS の HP で JSSO へのリンク予定
 - JOS 論文要旨の一部の日本語版 JOS の HP に掲載
5. 第 13 回作業科学セミナー(村井)
 - 日時:2009 年 11 月 22 日と 23 日、場所:福岡国際医療福祉学院シーサイドももち新キャンパス、参加費:昨年と同じ。演題登録:8 月末締め切り

6. その他

- ISOS と JSSO の共同の学会について浅羽を中心に検討継続
- USC 卒業生でロス在住の佐伯氏からの日本での講演打診について検討継続.
- 佐藤剛講演選考基準を来年度以降決定
- 次回 OS セミナー候補地沖縄を検討中

【報告】

1. 会員数 (2009年6月17日現在)
実質登録者数 261 名(会費未払含 365 名)
2. 会計中間報告
2009年6月17日現在残高 166,131 円

JOS : Journal of Occupational Science JSSO : 日本作業科学研究会 ISOS : 世界作業科学研究会 USC : 南カリフォルニア大学

事務局からのお願い

研究会のお知らせ等をメールで送っています。アドレスに変更事項のあった方，メールや機関誌がお手元に届いていない方は，事務局までご連絡をお願いいたします。

事務局アドレス : secretariat@jssso.jp
(坂上真理, 札幌医科大学)

JOS との連携交渉中

作業科学の国際的学術誌 Journal of Occupational Science (JOS) と当研究会との連携を進めています。

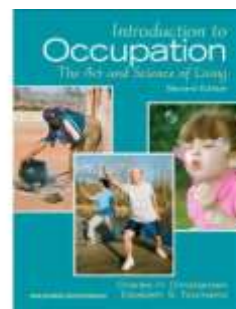
当研究会会員になると，研究会ホームページから，JOS 掲載論文の一部の要旨を，日本語で読むことができます。

JOS は年に 3 号発行していて，作業に焦点を当てた研究が満載です。

<http://www.jos.edu.au/>

本の紹介「Introduction to Occupation」

チャールズ・クリスチャンセンとエリザベス・タウンゼントが編集する本の第 2 版で，4 月に刊行されました。副題まで訳すと，「作業概論 生活することの技と科学 個人の経験と社会の組織化の中心的性質として人間の作業を理解するための新しい多面的視点」となります。序文によると，本書は日常生活に関心をもつ学生，実践家，研究者，教育者を読者対象とし，「人はいかによく幸せに生きるべきか」というソクラテス以来の哲学的問いに対して，作業の視点で答えることができると述べています。第 2 版では，労働関連の学問からの知見も取り入れ，文化，移行，バランス，場所，仕事とレジャー，作業剥奪，公正，作業療法と作業科学といったトピックスを作業科学の研究者が執筆しています。当研究会理事の浅羽氏もグローバル化と作業という最終章を執筆しています。



Christiansen C & Townsend E: Introduction to Occupation: The art and science of living 2nd ed. Upper Saddle River, NJ, Pearson Education, Inc

豪州作業科学センターで研修

オーストラリア政府奨学金「2009 年度エンデバー奨学金」を当会会員の高木雅之さん(県立広島大学)が受賞しました。

<http://www.study.australia.or.jp/scholarships/endeavour2009/>

第 11 回 OS セミナーで特別講演をしたアリソン・ウィックスさんがセンター長をしているウーロンゴン大学内のオーストラリアン作業科学センターで，今年 8 月から 4 か月間研修します。 <http://www.anzocsci.org/>

第13回作業科学セミナーのお知らせ

今回の作業科学セミナーのテーマは「作業科学の和と話と輪～作業がつなぐ人・明日・可能性～」です。このテーマはいろいろな意味が含まれており，例えば過去のセミナーのテーマにあったように作業が目に見えるものになり，メインストリームになり，何かを始める一歩を踏み出すには作業科学を学ぶ人のつながりが必要かも知れません。何か意味ある作業をしたい人が作業の専門家や作業に関係する人とつながると最高です。そして意味ある大切な作業と人がつながったら素晴らしい明日，可能性が生まれるでしょう。このようにテーマの意味をセミナーの中でたくさん見つけられると思います。

テーマの意味の一つとしてアジア内での作業科学のネットワークを作るために国立台湾大学准教授の Jin-Ling Lo さんを招待します。

ワークショップでは病気や障害にあった後，どのような作業を行い，どのように健康になってきたか，2人の方にお話ししていただきます。佐藤剛記念講演では吉備国際大学の港美雪さんから作業科学の知識を生かした地域での実践，作業をすることで人はどのように変わっていくか，という話を聞けると思います。シンポジウムでは作業科学のネットワークを作るにはどのようにしているか，作ったことによって何が変わったか，何が課題か，これからどのような方向へ進んでいくのか，等について話題提供者と共に考えます。2日間のセミナーは，作業について語り合い，考える「作業まつり」です。セミナーが終わったときにはいくつものネットワークが生まれていることでしょう。

2009年11月22・23日，福岡国際医療福祉学院シーサイドももち

新キャンパスで「作業まつり」がみなさまを待っています。セミナーの詳細は随時日本作業科学研究会のホームページで更新してまいりますのでご参照下さい。研究発表を募集しております。演題の応募をお願いいたします。

(村井真由美，愛と結の街)

OS セミナー講師 Jin-Ling Lo 氏の紹介

日々の作業から得られる感情と主観的健康観の間には関係がある，という研究をされています。発達障害領域から脳卒中



患者と家族の支援まで幅広い関心をお持ちです。WFOT の作業科学プロジェクトのメンバーでもあります。主な英語文献は次の通り。

Lo, J. L. (1996). The relationship between daily occupational affective experiences and subjective well-being. Occupational Therapy International, 3:190-203.

Lo, J. L. & Zemke, R. (1995). The relationship between affective experiences during daily occupations and subjective well-being measures. Occupational Therapy in Mental Health.

文献情報は次のサイトから得ました。

<http://homepage.ntu.edu.tw/~otntu/eng/efct/lo.htm>



セミナー「自然・作業・文化」お知らせ

人は「作業」を通して自然とかかわることにより、文化を築いてきました。近年の地球温暖化は、「人間活動」によることが明らかになっています。国際セミナー「自然・作業・文化」を開催し、「自然と作業と文化の関係」を考え、近年の地球環境問題に貢献していくための方法について検討します。

日時：2009年11月21日(土) 10~16時

講演：通訳があります

「作業科学と自然環境問題」

(Moses Ikiugu, 南ダコタ大学 作業科学)

「日本史における環境変動と生活史」

(Bruce Batten, 桜美林大学 日本史)

会場：西九州大学神埼キャンパス7号館

定員：100名(先着)

費用：1,000円(学生500円)

申込・問合せ：西九州大学(佐賀県神崎市)

マーク・ハドソン

Tel: 0952-52-4191 Fax: 0952-51-4481

Email: hudsonm@nisikyu-u.ac.jp

講師のMoses Ikiugu氏は、カオスと複雑系の概念を使って、人間の作業的生活を考えています。人間の作業的生活は、時間経過の中で選ばれ遂行される作業-生活-軌跡

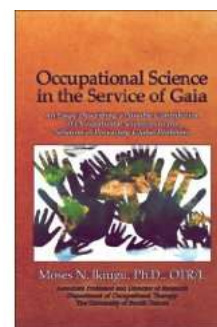
(occupational-life-trajectory)として理解しようという提案です。この論文の中で、作業は、①個人の意味と集団の中での意味がある、②健康感を高める、③アイデンティティと関係する、④人生の一貫性(継続性)を生む、と述べられています。(Ikiugu MN:

Meaningfulness of occupations as an occupational-life-trajectory. J Occup Sci 12: 102-109, 2005.)

さらに、Occupational Science in the Service of Gaia: An Essay Describing a Possible Contribution of Occupational Scientists to the Solution of Prevailing

Global Problems, Publishamerica Inc, 2008.

(「ガイアサービスにおける作業科学：流行するグローバル問題解決への作業科学者の貢献可能性を論じたエッセイ」)を出版しています。



作業科学を学べる大学院紹介

大学院入学願書受け付けが早い大学では、7月から始まります。作業科学のコースがある大学院は次の通りです。

- 聖隷クリストファー大学 大学院 リハビリテーション科学研究科 リハビリテーション科学研究専攻
- 県立広島大学 大学院 総合学術研究科 保健福祉学専攻 作業遂行障害領域
- 茨城県立医療大学 大学院 保健医療科学研究科 理学療法学 作業療法学専攻 作業学分野
- 吉備国際大学 大学院 保健科学研究科 リハビリテーション援助分野
- 札幌医科大学 大学院 保健医療学研究科

編集者からのお知らせ

今年3月に手術を受け26日間入院しました。生まれて初めての経験でした。5月から休みを取りながら仕事を始めました。作業の意味を考え、優先順位を決め、どんな満足を感じるかを常に振り返る日々です。

お知らせなど、このニュースに掲載したい記事がある会員は、吉川ひろみ vosikawa@pu-hiroshima.ac.jp まで、お送りください。ニュース発行は年2回の予定です。